

■ 課題研究報告 ■

Ⅲ スクール・エスノグラフィーの可能性

司会者 久富 善之 (一橋大学)
 報告者 結城 恵 (群馬大学)
 酒井 朗 (お茶の水女子大学)
 池田 寛 (大阪大学)
 討論者 稲垣 恭子 (京都大学)

本課題研究は、前年にもたれた「方法としてのエスノグラフィー」を受けて、開催されたものである。前年の課題研究において焦点化されたのは、エスノグラフィーという方法に内在する多様性であった。本部会では、そこでの議論を前提に、学校という場に対象をしぼって、エスノグラフィックな研究方法の可能性の追究がめざされた。報告者として登場したのは、スクール・エスノグラファーとして豊富な経験をもつ、結城恵氏(群馬大学)、酒井朗氏(お茶の水女子大学)、池田寛氏(大阪大学)のお三方である。

まず結城氏は、「見えるものから見えないものをみる」と題して、氏が幼稚園で実施した参与観察から得られた素材をもとに、どのようにデータを収集し、そこからいかなる分析カテゴリーを立ち上げるかという点に焦点を当てた報告を行った。氏にとって、見えるものとは「教師が子どもたちの活動を集団で組織する仕方」のことであり、見えないものとは「子どもたちの集団生活を継続・維持するメカニズム」のことである。氏は、ドメイン分析・タクソノミック分析・コンポーネンシャル分析の三段階からなる

分析手法を具体的に示し、知見として、目に見えない集団への包摂・排斥原理の存在を指摘した。

次いで酒井氏は、「指導とティーチングローカル・ノレッジの探究」と題し、氏のグループが日米の複数の小学校で実施したエスノグラフィックな調査をもとに、両国に特徴的な「教授行為についての考え方」をいかに抽出したかを論じた。氏が注目するのは、教師たちの日常語やルーティンワークである。すなわち、教師たちはある発話や行為を繰り返すが、それは、教師たちに外在する知識(=ローカル・ノレッジ)の存在を証明するものに他ならない。そこで氏が抽出したのが、「指導」と「ティーチング」という、日米の教師たちが日常的に使うことばである。認知面にかたよった後者に対して、前者は、すべてをも含みうる広い意味をもつ。両者の内容を検討することによって、現場の現実をよりよく理解するすることができる、と氏は主張した。

最後に池田氏は、「教師の声の多声性と文脈性」と題して、関西の同和教育推進校で継続しているアクションリサーチ

課題研究報告

的研究のなかで得られたインタビューデータをもとに、教師の発話をもつ文脈性を広く、深く探ることを可能にする「多声法的アプローチ」の意義を提唱した。氏が重視するのは、エスノグラフィーの「ホーリスティック（総体的）」な性質、すなわち対象をできるかぎり「丸ごと」理解しようとする精神である。そのためには、出来事の多面性や発話の多声性をふまえた分析・記述の方法が工夫される必要がある。氏は、その一つの試みとして、同推進校でみられる「抽出促進」という個別指導の一形態についての、2人の教師のディスコース分析を提示した。

休憩をはさんだのち、以上の報告に対して、まず指定討論者である稲垣恭子氏（京都大学）からコメントがなされた。氏は、研究者と当事者との関係、典型的なものからルールを抽出するというアプローチの妥当性、個別事例の文脈性への配慮、教育実践への貢献などの諸点について、各報告の主張をふまえたうえで、問題提起と各氏への質問を行った。それに対して、3人の報告者からの適切なリプライがなされた。その後、残された時間は、フロアとのやりとりに費やされた。そこで話題にのぼったのは、データのみならず枠組み自体が質的であるというエスノグラフィーの意義、抽出するローカル・ノレッジの妥当性を保証する方法的工夫、学校というなじみのある場に異文化理解の方法として発展してきた

エスノグラフィーを適用することの意味、多声法における研究者の声の位置づけ、といったトピックである。

例によって、十分な議論をつくす前に、予定された時間が来てしまい、提起された重要な諸論点に決着をつけることはできなかった。しかし、会場に集まった聴衆は、3つの報告とその後のディスカッションを通じて、スクール・エスノグラフィーの輪郭とその方法的な可能性について、一定のイメージをもつことができたのではないかと思う。

最後に、この課題研究の企画者としての感想を付け加えておきたい。「エスノグラフィー」という方法についての、2度にわたる課題研究を通じて明らかになったのは、何よりも、このことばで語られうる研究営為の多様性であり、そして、その多様性・多義性ゆえの、方法的可能性の高さである。ある研究方法の有効性は、具体的な研究成果を通じてしか評価しえない。包丁の切れ味は、モノを切ってみてはじめてわかるもので、能書きばかりいくら読んでも、何の役にも立たない。その意味で、今年の課題研究は、具体的な研究事例をふまえたものであったため、議論が内実のあるものとなったのではないかと自負している。われわれはようやく、エスノグラフィーという、多様な切り方ができる便利な包丁の切れ味を、具体的に確かめうる段階に到達したようである。

（文責：前研究部 志水宏吉）